

## 英語語法覚書（Ⅱ）

### ——形容詞相当語句について——

中 村 志 郎

#### § はじめに

3年前、本論集で「英語語法覚書——分詞について」を書いた。<sup>\*</sup>それは文学系の研究徒が日頃の文学的渉獵においてその副産物として得た、語法カードの整理から生まれたものであった。従ってそれは英語学専攻者やグラメアリアンの、新しい言語観や新文法理論に基づくような論考ではなくて、日頃英語教育に携わる者として日頃気付かされる文法・語法の諸現象、特にいわゆるスクール・グラマーの領域からはみ出る言語現象を捕捉整理したもので、その意図するところは全く日常的教育的効用にあり、それらはみ出しの文法・語法現象に対して授業担当者が教室で補足的説明を加える際の、用例集として利用出来ればというものであった。幸いそのような用途の為に有用であるという感想や励ましを下さる方もあったりして、今回はその第2篇として形容詞相当語句に関するカードを整理してみた。ここで言う形容詞相当語句とは Onions のいわゆる Adjective Equivalent であり、名詞限定要素としての形容詞句及び節のいくつかの用法について、以下考察したい。

筆者の「語法カード」の来歴や性格は初回のとき説明したのでここでは繰り返さないが、スクール・グラマーではカバーし切れない言語現象が、あるレベルの言語材料では決して珍しいものではなく、相当に出現するものであることを例証する為に、類似した例文を以下かなり執拗に列挙することを、前回同様あらかじめ断っておきたい。なお筆者はその読書範囲で当該用例を概ね落ちなくカードに採録しており、採録したカードは余り捨てずに本稿で利用しているので、本稿項目相互間の例文の多少はほぼそれらの出現する頻度の度合を示すものと考えていただいて差し支えない。例文には通し番号を付けてあるが、それは本小論末尾の出典一覧の番号と呼応しており、そこには著者・筆者名、作品名（長篇小説や短篇集、戯曲、その他単行書名はイタリック字体、単一の短篇の類は“ ”で囲む）を示してある。版や章、頁は繁雑を恐れ割愛した。なお例文に加えられた A. B. C. D. の符号は、

A: American	C: Colloquial (Conversational)
B: British	D: Descriptive

の別を表わす。即ち A は筆者がアメリカ人であることを、B は英国人であることを示し（判定のつかぬものは落としてある）、C は会話部分であることを、D は地の文であることを示す。組み合わせると四通りに区別される。——(A. C.), (A. D.), (B. C.), (B. D.)

※ 金沢大学教養部論集・人文科学篇22-2 (1984)

### §1 関係詞節の二重限定

1. 1 接続詞 *and* にはその前後を対等に結びつける通常の用法のほかに、結合力の特に強い場合がある。

a) To love and to be wise are two different things.

b) To love and be wise is scarcely granted to god.

この二つの諺は結局同じことを言っているのであろうが、主語を結びつける *and* の働きには大きな違いがある。a) では「両者は別のことだ」という内容にも示されるように、*and* は二つの異った主語をそれぞれ独立したまま連結しているが、b) の *and* は二つのことの同時成立をもたらすものであり、述語動詞も *is* が用いられていて、「愛しながら賢明であることは神にも至難のことだ」と愛の盲目性を歯切れよく訴える。次に挙げる Tennyson の *In Memoriam* の中の有名な句

c) 'Tis better to have loved and lost than never to have loved at all.

でも同じことが言え、「愛した」と「失った」の経験は別々のことではない。この同時成立の b), c) 例では *and* は主語部分に入っているが、述部に入ったものでこれも諺から例を引くと、

d) You can't eat your cake and have it.

e) You cannot touch pitch, and not be defiled.

このような *and* は勿論諺的なものにだけ用いられるのではなく、広く出現するが、スクール・グラマーで扱われることは少ない。スクール・グラマーでは唯、冠詞の項で

f) He is a poet and novelist.

の類の例が出てくるが、この *and* は二者一体の関係を示すものとされる。D. H. Lawrence の代表作のタイトル *Sons and Lovers* の *and* がこの二者一体である。周知の如く、この小説の主題を考えれば、「息子と恋人」という訳語は不適切で、正確には「(母親の) 息子で恋人である者達」とするべきであり、低俗を恐れず言うなら「息子は恋人」とした方が適切なのであろう。このような二者一体の「関係」を示す *and* に比べると b) ~ e) のものは同時成立即ち「行動・状態の同時性」を示す点に特色があり、一般に動詞的要素を結合するものである。

1. 2 前項の同時成立は実は本節標題の「関係詞節の二重限定」と直接のかかわりはない。本節では関係詞の導く形容詞節群の同時成立を扱おうとしている。即ち Jespersen のいわゆる Double Restriction である。

001. ... there is no information that I could give which would help you. ... (B. D.)

002. ... I encounter more and more characters whom I have forgotten, who beckon to me from the pages. ... (B. D.)

003. There were no revolutions that he could remember which had not been made for justice... (A. D.)

004. There ain't nobody else that I know of between here and the river who has got a brand-new automobile. (A. C.)

005. There is always... some one thing which we can do which is truly for the best and truly for the good of all concerned. (B. C.)

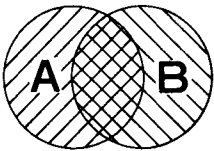
006. You are the only young man that I know of who ignores the fact... (A. C.)

これら6例において先行詞はいずれも「～であり同時に～である」という二重の限定を受けており、この二重性は前項における「行動・状態の同時性」の and により結合された二つの語句の用法に類似している。ところが注目すべきことに、関係詞節群の二重限定の場合にはその肝心の and が欠落している。二つの関係詞節はまるで畳みかけるように連なり重なっているだけである。

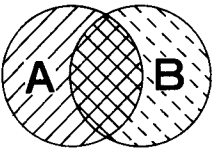
二重限定とはどういうことであろうか。Jespersen は次のように定義する。

...two relative clauses are only seemingly coordinated, while really the second restricts the antecedent as already defined by the first... (MEG. III, p. 87)

すでに第1の関係詞節で限定された状態での先行詞を、第2の関係詞節がまとめて制限するというのは。しかし実例に即して端的に言うならば、被限定物は条件Aと条件Bが



重なった部分と見ることが出来るだろう。今006を例にとるなら、「自分が知っている唯一人の若者」ということは实际的にあり得ないことである。「自分が知っている若者で、その事実を無視するのが唯一人」ということである。「自分が知っている」という条件Aと「事実を無視する」という条件Bの両方を充たす若者はあなたしかいないということである。知っている若者群と無視する若者群の重なった部分が、今求められている被限定物である。しかし更に考えてみると発話者にとり、条件Aと条件Bは対等には意識されていないであろう。条件としての重みはB、即ち後半にあるのだろう。事実を無視する者ということが発話者の関心の中心にあり、自分の知っている中でというのは、極端に言えば言葉のあやであろう。ボクシングで言うと前半部Aはジャブであり、決定打は後半部Bにある。従って発話者は、前半部を



発話しているときは条件Aに属する集団を意識していても、後半部を発話するときはすでに焦点が決まっていて、Aと重なり合うBの部分だけを意識しているように思われる。とすれば二重限定関係詞節の働きは、より正確に図形化すれば2番目の図のようになるものなのだろう。

1.3 すでに挙げた6例ではいずれも、二つの関係代名詞の順序が「目的格+主格」であって、二重限定の形式としてはこれが一番多い。そのことはジャブと決定打ということと確率的に関係があるのかもしれない。しかし勿論別の形式もある。逆の「主格+目的格」では、

007. ... if they say anything about the book that's intelligent that we don't know you tell me. (A. C.)

これの 'that.... know' という形は条件Aとしてよく出現するものであるが、それが後半B条件となっている。今の場合、自分らの著書について何か自分らの知らない批評が出ていたら知らせてくれというのが発話者の関心事で、気のきいた批評ということは副次的な事柄に過ぎないのである。

008. ... the great part which he felt awaited him the nature of which he only dimly apprehended. (B. D.)

これは '主格+所有格' である。'of which 所有格' の二重限定における使用も興味深いが、条件Aの主格 which にも挿入節 'he felt' が入っていて、しばしば目的格と混同される種類のものである (3. 2 参照)。次例は '目的格+目的格' の場合である。

009. There was nothing that he could have asked her that she would not gladly have given him. (B. D.)

010. Sometimes when I listen to it I feel there is nothing that man is capable of that I cannot do. (B. C.)

両方共 W. S. Maugham からの用例であるが、いずれも歯切れのよい文体で、条件Bによって止どめを刺すという関係詞節二重限定の効果を十分に活用している。関係代名詞の種類については、that の使用は条件Aに多く、条件Bが that のときはAの方も that になっている。

1. 4 関係代名詞の目的格はしばしば省略される。二重限定の場合も目的格は省略されることが多い。前項で '目的格+主格' の出現頻度が高いことを述べたが、この形で目的格の省略された場合は一段と多い。以下例示すると

011. It was the first thing I'd ever read that gave me the idea sex could have beauty. (D.)

012. Culverwell explains that he now needs a friend he can "trust" who will "accept both Culverwell and Gomez"... (A. D.)

013. There must be some boy he knows who's trying to show off as advanced and wicked... (A. C.)

014. There's only one incident I've been able to rake up that might suit your book. (B. C.)

015. Think of all the people I know who know people. (A. C.)

016. That is all I can think of that is safe from the children. (B. C.)

017. David's the only young boy I ever knew with any brains that isn't scared. (A. C.)

018. ... are the only people we can discover in this part of the county who are still living in the same house... (B. D.)
019. I think you are the only woman I have met who is so intrinsically detached... (B. D.)
020. ... this is the only spot I know in the world that is before-the-war. (A. C.)
021. Who has given the colliers all they have that's worth having...? (B. C.)
022. There was the only man I ever met who knew the answers. (A. C.)
023. You're the only one I know who loves his parents. (A. C.)
024. — the only love-affair I have ever had which ended without pain or regret. (B. D.)
025. I don't mind anything you do that makes you happy. (B. C.)
026. — especially if they were about a thousand times nicer than the people you know that're alive and all. (A. C.)
027. — there is no single thing I do that is more important than going into that awful room 307. (A. D.)
028. ... he did everything else he could think of that he thought might make her talk to him. (A. D.)
029. She was the only person he ever met who could look up passages and quotations to show him in the middle of the conversation... (A. D.)
030. I'm writing about the only person I've ever known whom, on my own terms, I considered really large, and the only person of any considerable dimensions I've ever known who never gave me a moment's suspicion that... (A. D.)

最後の 030 には「〔関係代名詞〕+関係代名詞」が 2 組含まれており、第 2 組は 011~029 と同様「〔目的格〕+主格」であるが最初の組は「〔目的格〕+目的格」である。次に列挙するのはこの形式のものである。

031. It's the only form of jewelry a man can wear that women fully appreciate. (B. C.)
032. Is there anything you need/That you can't find in the kitchen? (B. C.)
033. ... the invitations he receives from other universities that he declines... (A. D.)
034. --- Earnest mentioned several parties he had heard about to which the Jaegers hadn't been invited... (A. D.)
035. She was the only girl he ever knew with whom he could understand how another man might be preferred. (A. D.)

036. I think of him with affection — even love — as the only film producer  
I have ever known with whom I could spend days and nights of conversation... (B. D.)

この目的格二つの形式で省略されるのは常に前半部の目的格である。B条件の目的格関係代名詞が省略された例は手持ちのカードにはない。先行詞と直結してはじめて省略しうるものであり、先行詞と遠く離れてしかも and で結ばれることのない二重限定B条件の関係代名詞がもし省略されれば、意味内容の伝達に混濁が起きるだろう。例えば次のような挿入節付きの関係詞節と区別がつかなくなるおそれが出てくる。

Do you think I'll recommend a man whom I know you dislike ?

次の2例は「〔目的格〕+所有格」の場合である。

037. ...he was the only person I saw that night whose nerve had gone. (B. D.)

038. A thoughtful gift for someone you love whose eyes tire easily. (A. D.)

1. 5 関係代名詞だけでなく、当然のことだが関係副詞が導く節の二重限定もある。

039. ...it's the only place I've ever been in my life where I didn't feel like  
somebody was sitting on the back of my neck all the time. (A. C.)

この場合もA条件の関係副詞が、一般に省略されることの少ない where であるにもかかわらず、省略されていて「〔関係副詞〕+関係副詞」という二重限定になっている。

以上は二つの関係詞節による二重限定を見てきたのであるが、「句+節」による二重限定の例を最後に挙げておくと、

040. There is probably no critic writing today who would say of him... that he  
was 'the greatest writer born in the 19th century.' (B. D.)

041. Was there ever yet anything written by mere man that was wished longer  
by its readers...? (B. D.)

042. ...there were but few things done in the town that he could not see the  
inside of. (B. D.)

040 は「現在分詞+関係代名詞」、あとの二つは「過去分詞+関係代名詞」の例である。

1. 6 Jespersen は「二重限定は特に否定表現のあとで頻出する」と言っているが(MEG. III, p. 88), これまでの例文 001~042 における43例で見ると、041の疑問文も含みいわずに否定的内容に続くものは10例で、特に多いという印象はない。むしろ二重限定を受ける先行詞は、それ自体が強い限定語であったり、強い限定語で修飾されたりの場合が多いと言った方がよいだろう。即ち43例中 the only で修飾されているもの16例, no で修飾されているもの (nothing を含む) 7 例, anything 4 例, all や everything 4 例, その他 the first や only one の修飾を受けているものなどで、これらが全体のうちの多くを占める。後に続く二重限定を予想することで先行詞自体が強い限定語と結びつき易いということである。

う。例えば最多例の the only で考えれば、039 の「行ったことのある所で、誰かに押さえつけられていると感じないで済んだ唯一の場所」という内容に於て、発話者は条件 A と B の重なりによって「場所」を一箇所に絞り込む。このような二重限定を予測するとき発話者は思わず the only を先行詞にかぶせるということになり勝ちなのであろう。

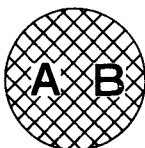
1. 7 以上 and で結ばれることのない関係詞節二重限定を見てきた。これに対応して二つの関係詞節が and で連結される場合が、当然のことながらある。

043. Jude seems to represent the early Hardy, for whom success appeared illusory and whose private life... was a torment. (A. D.)

044. ... to my friend Sir G. D., whose mother was a Spanish lady, and to whom the language is half-native... (B. D.)

045. Do you mean to say that that girl, who had the impudence to ask to see me two days ago, and whom I told you to send back to her father with my orders that he was to give her a good hiding, is here still? (B. C.)

3 例のうち最初の 2 例の先行詞は固有名詞、最後のものは that girl で、当然発話者の意識にそのイメージはすでに固定されている。このようなとき条件 A である範囲を定め、条件 B で一点に確定するような関係詞節の二重限定はもう出る幕がない。and で結ばれた二つの関係詞節 A, B はジャブと決定打でなく対等の重みを持ち、あるいは同じ内容の言い換えであったりする。二重限定に対し等位限定とも言うべきこの構文では、条件 A と条件 B



はそれぞれ独立してきっちり先行詞を限定し、その際はみ出るものがない。条件 B を除去し条件 A だけで限定しても nonsense にはならない。図示すれば A, B 二つの円は完全に重なり合う。

このように見てくると「and なき二重限定」とこの「and 付等位限定」は名詞修飾の形容詞の二つの形式と対応するものと考えてよいのであろう。

a) a beautiful white flower (白い花←美しい)

b) a beautiful and fragrant flower (花←美しい/匂いがよい)

b) の and で結ばれた二つの形容詞は対等に flower を修飾し、発話者の関心は両形容詞に対して平等に働いている。a) の beautiful は white flower を修飾し、white は今の場合客観的な属性で、発話者の関心は専ら主観的な beautiful に向かっている。つまり beautiful が二重限定の条件 B, white が条件 A で、順序から言うと二重限定関係詞節の場合と逆である。しかし被限定語に対して A が近く B が離れているという観点では両者一致した法則性をもつ。

上記 043~045 の 3 例は非制限的用法で、二重限定との比較にはなじまないとするならば、以下の例はいずれも明確に制限的用法の場合である。

046. There are perhaps people who regard this as the painful but righteous

execution of a solemn duty, and who see Sue here exalted to her highest as a strong and noble woman. (B. D.)

047. ... the story of the two brothers who are clergymen and who let their father drown. (B. D.)

以上は主格と主格、次は目的格と目的格の場合である。

048. ... a young female creature whom he had gone into and whom he desired again. (B. D.)

049. ... it seemed to presume an intimacy which she had never acknowledged and which I had never claimed. (B. D.)

050. There are a lot of things I want you to tell me and which I think I ought to know. (B. C.)

050 ではA条件の関係代名詞目的格は省略されている。以下の例は主格、目的格、所有格の組み合わせの場合である。

051. ... from a lady who called herself Mrs. Yü and whom he with a consular passion for precision insisted on calling Miss Lambert. (B. D.)

052. There was another event which I couldn't put down in the notebook and which sickened me... (B. D.)

053. ... she was once a woman whose intellect was to mine like a star to a benzoline lamp: who saw all my superstitions as cobwebs that she could brush away with a word. (B. C.)

最後の 053 には and がなく、コロンが間に入っている。これは二重限定か等位限定か。ここで条件Aと条件Bは対等の内容、むしろ同じことを別の言い方で述べていて、それぞれ独立して先行詞を修飾し、二つのうち一方を除いても意味をなす。ということであればこのコロンは and と同じ働きをしていることになる。

1. 8 and だけでなく but もまた二つの関係詞節を対等に結びつける。順接の and に対して逆接に連結する点が違うだけである。

054. ... Miss Rosetta G. Spearing, who says she is a distressed writer, but of whom I know nothing whatever. (B. D.)

055. ... Marilyn, whom she likes well enough... but whose inane babble drives her wild. (A. D.)

056. It was the address of this girl that wasn't exactly a whore or anything but that didn't mind doing it once in a while... (A. D.)

これらは固有名詞や this girl を先行詞とするが、以下の例は一般の場合で、また明らかに制限的用法である。



057. ... asked him in cold level words which had once been English, but which seemed to have lost the accent of nationality. ... (B. D.)
058. ... Chicago friends who were to take her over, but who had been detained. (A. D.)
059. There are a great number of biologists who at least tentatively believe in evolution, but who nevertheless are active members of Christian churches and find no problem at all. (B. D.)
060. The sick man was like a dog that is ill but which growls from a deep corner. ... (B. D.)

これらは両方共に主格関係代名詞である。次は共に目的格の例である。

061. ... from one whom I have. ... known as a name. ... of distinction. ... but whom I believe. ... I have never seen in the flesh. (B. D.)
062. ... she picked up a novel which she didn't want to read, but which she was going to read. (B. D.)
063. ... finds himself pursued for a murder of which he is entirely innocent but which he believes he has committed. (B. D.)

以下は主格、目的格、所有格の組み合わせの例である。

064. ... in a voice which was not trembling or scared but which we may call fairly expressive. (B. D.)
065. She passed close to. ... men who were laughing, but whose laughter could have been struck dead by a simple word. (B. D.)
066. ... a story that was largely incomprehensible to One Eye, but every detail of which the she-wolf knew. (A. D.)
067. You was telling about. ... the things you can't see but which make men sick. (A. C.)

最後 067 では 050 と同様条件Aを導く関係代名詞目的格が省略されているが、二重限定に比べて等位限定の方は関係代名詞の省略は少ないようである。また 043~067 の and, but 入り25例中A条件が that の場合は 2 例、A条件B条件共に that が 1 例で、二重限定全体に比べて that の使用頻度は著しく低い。

#### 1. 9 一見二重限定に見えるがそうではない場合がある。

068. It involves a study of the human heart which leads us through devious mazes of passion, out of which it is difficult to find our way. (A. D.)
069. There's not a single being on earth that I would want to look at his dear face now, to whom I would willingly take him. ... but you. (B. C.)

共に形は二重限定の場合と同じであるが、068の二つ目の *which* の先行詞は *mazes* である。069 は内容を見ると A, B 同等の重みがあり、畳みかけではなく同じ内容のことを言い方を換えて述べていて、二つの節の間に *and* が入る方が望ましいと思われる。次の二例は先行詞の後でコンマがあるが、069 と同様な理由でやはり *and* が欲しい。

070. She remembered the funny old mistress, whose assistant she had become, whom she had loved to help. . . (B. D.)

071. . . it was about the old cook I inquired first, whose name I could never remember, whom I saw only as a figure in a long white robe. . . (B. D.)

070 では A, B は敷衍的に展開し、071 では言い換える様に展開していて、いずれも等位限定の展開である。次例の場合はその内容からして *and* ではなく *but* が間に欲しいところである。

072. . . he had listened eagerly to people who pretended to know, who knew nothing. (A. D.)

069~072 のように二重限定に見えながら等位限定と思われる場合が時にあるが、その逆の例は手持ちのカードには見つからない。

## § 2 関係詞の多様な用法

2. 1 関係詞は多様多彩に使われるが、同時にその用法は論理的で明晰である。

073. The President. . . should be a man on the tendency of whose writings there is no difference of opinion. (B. D.)

‘関係代名詞所有格＋名詞’が前置詞句の目的語になって後につながり、そこにはきっちりした構成の美しさがある。

074. She dismissed, however, the maid to keep whom had been almost a matter of principle. . . (B. D.)

関係代名詞が不定詞の目的語になることは少くないが、その不定詞が関係詞節内の主語であるというのは余りない。しかしそれは極めて論理的な構造であり、そして極めて論理的に次のように置き換えることが出来る。

a) whom to keep had been. . .

b) whom it had been. . . to keep

Jespersen は 074 の *to keep whom* のような語順を ‘somewhat pedantic’ と言い、b) のような分離型を ‘colloquial’ と呼んでいて、a) のタイプに特にコメントがないのはこれが一般的ということだろう (MEG. III, p. 183)。

075. . . he had no authority for making public the concerns of a property in managing which he was only a paid servant. (B. D.)

076. ... *Winesburg, Ohio* is far from the pessimistic or destructive or morbidly sexual work it was once attacked for being. (A. D.)

077. ... she's not the kind of woman who you can imagine having a guilty secret. (B. C.)

075 は '前置詞 + 動名詞' において関係代名詞が動名詞の目的語, 076 は '前置詞 + being' において省略された関係代名詞が動名詞 being に伴う補語, 077 では who が関係詞節中の目的語たる動名詞 having の意味上の主語になっている。これらを見ると全く自由自在に関係代名詞が使いこなされている感がある。

078. I shall be here... on the 12th. and 13th. Sept. if you like to call on either afternoon, letting me know which a day or so before, that I may not be out. (B. D.)

ここでは分詞構文 letting me know の目的語として関係代名詞が使われている。Jespersen に言わせると, 分詞構文がらみのこのような関係代名詞も 'not natural' ということになるのかもしれないが (*MEG. III*, p. 184 参照), この用例を見ると論理的かつ融通無碍の感がある。そして日本語にこのような自在な融通性と緻密な論理性をもつ何か語法があるだろうかと思われてくる。この 078 は T. Hardy の書簡集からの用例であるが, 彼の書簡集には興味深い関係代名詞の用法がよく出現する。例えば次の 4 例の関係代名詞は命令文中の目的語になっている。(第 2 例以下前文略)

079. I am obliged on account of age to get my letters typewritten whenever I can, which please excuse.  
 ..., which please pardon.  
 ..., which please let me have back.  
 ..., for which accept my warm thanks. (B. D.)

次例もやはり Hardy の書簡集からで命令文ではないがそれに準じる用法である。

080. I have received the volumes of poems, for which many thanks. (B. D.)  
 Jespersen の *MEG. III* に Shelley 例として,

Inclosed is ten pounds — which be so good as to say that you have received safe. (*MEG. III*, p. 196)

が出ているが, 関係代名詞のあとに命令形が出るのは手持ちのカードでは Hardy 例以外になく, 彼の書簡集でも例は第 6 巻 (1920年~25年) に集中している (第 7 最終巻は未刊)。書簡という特性もあろうが, 彼がこの時期好んで用いた表現と言えよう。関係代名詞の用法は多彩であると共に, ある意味では恣意的な要素が強いのではなからうか。

2. 2 次の 2 例は比較的珍しいものと思われる。081 はこれも Hardy 例であるが関係代名詞 whose が独立所有格として使われている場合, 082 は現代アメリカのものだが複合関

係代名詞 *what* の目的格が物ではなく人を表わしている場合である。

081. I offer myself and my energies. . . to you, my dear, dear lady, whose I shall be always ! (B. C.)

082. Your wife was in the back yard with your boy and what I took to be an old girl friend. . . (A. C.)

2. 3 次の2例の関係代名詞目的格は二つの述語動詞の共通目的語ではなく、2番目のものの目的語である。

083. . . my precious babies, which I must go back and see. (A. C.)

084. How could I possibly know anything that he ought to stay and listen to ? (B. D.)

統語的に問題がありそうだが、*to* と置き換えることの出来る *and* と見れば、納得出来る形なのであろう。それでは次の G. Greene 例はどうであろうか。

085. It was a group of yucca farmers whom we were now going to meet and listen to their complaints. (B. D.)

*whom* は最初の動詞の目的語であり、2番目の '*listen to*' には独自の目的語が続く。これも *and* が *to* になれば形は整うが、このままでは統語的乱れと言わざるを得ないだろう。

2. 4 所有格関係代名詞 '*of which*' はスクール・グラマーでも説明され、出現度も高いものであるが、学生には最も苦手の領域であるので少し例を整理してみよう。

The house the roof of which is red is mine.

'*of which*' が限定する名詞の直後にあるこの形式は最も普通にスクール・グラマーで扱われる。これに対して次例は直前型である。

086. She took up a pen, of which the handle was a peacock feather. . . (A. D.)

087. That letter (of which only the beginning is quoted here). . . (B. D.)

次例は分離型である。

088. . . he had chosen eighteen, of which these four were a sample. (A. D.)

内容的にこれは *these four of which* ではなく、*a sample of which* である。*a sample* が *were* に続く補語である為、直前型や直後型では *be* 動詞が最後になる *clumsiness* が起こる。それを避ける為の分離型であろう。分離型を更に3例挙げると

089. . . a bottle of aspirin for the headaches of which Sarah felt sure that she and Sam were the cause. (B. D.)

090. . . some community of which he can feel himself a member. (B. D.)

091. . . between walls of concrete of which he couldn't see the top through the snow. . . (B. D.)

089 は 088 と同類、090 の *a member* は目的格補語でやはり文末の方がおさまりがよいよ

うである。しかし 091 では the top は see の目的語であり分離の理由は見当たらない。補語の場合だけでなく広く出現しうることだろう。

092. ... the little crowd I was in with, that I used to be the star of, was the snobset... (A. C.)

ここで the star は補語で分離されているが更に先行詞が crowd の為か which が that になり, of が末尾に回って, 結局関係詞節は the star of で終る。042 もこれと同型であった。Jespersen は, set phrase を含んでいないときこのような形は余り自然でないとし, 今は用心深い作家は避けていると言う (MEG. III, p. 187)。

093. I enclose a letter to which the answer had better perhaps come from you. (B. D.)

093 は of which でなく to which であるが, 内容的にそれは the answer を限定する形容詞句であり, 直前型の所有格と同様な働きを示している。

## 2. 5 関係詞の先行詞も多様である。

094. What do you say we really concentrate on this man's name who she brought home? (A. C.)

先ずこの who は whom の代用, 米語の会話体によく見られる形であるが (3. 1 参照), その先行詞は所有格 man's である。

095. The only crazy I was was when I married him. (A. C.)

先行詞は crazy であるが, 内容から見て名詞ではなく形容詞, しかも the only がついた制限用法で, 省略された関係代名詞は which か that (補語), 「私が唯一度(彼に)夢中になったのは結婚したときだけ」という意味である。次例も形容詞が先行詞であるが非制限用法で, これは比較的によく見られるものである。

096. ... (she is) very glad to see me, which beautiful women are not always. (B. C.)

同様例をもう一つ,

097. My taste for the theatre is, I fear, weakening, which hers is certainly not. (B. D.)

この場合先行詞は現在分詞 weakening である。

2. 6 一般に 'all the little (few) + 名詞 + that' で置換出来る関係形容詞 what についてはスクール・グラマーで扱われることもある。

098. ... we would go into the mesa with what food and tools we could carry... (A. D.)

しかし 'and that + 名詞' で置き換えることの出来る which の関係形容詞用法に触れられることはない。この which の用法を Jespersen は,

... at best it is rather clumsy device and is avoided by many writers. (*MEG. III*, p. 126)

と判定しているが, Hardy, Murdoch などの例を次に三つ挙げると,

099. ... he did once meet with a youth...; which youth asked him to lend... (B. D.)

100. ... the candles gave a bright but soft light to the room, in which gentle illumination the stained walls were... not conspicuous. (B. D.)

101. ... he... came in... to ask her if...; to all which inquiries she replied in the negative or with indifference. (B. D.)

youth の繰り返し, light と illumination, 先行する間接疑問と inquiries というように先行詞と同じ語や同義語が反復され, 常に非制限的である。

2. 7 文頭の関係代名詞 which も時々見られる用法であるが, 勿論スクール・グラマーでは触れられることはない。

102. "Don't worry, she (the mare)'s safer than a cradle." Which, in my case, was a necessary guarantee... (A. D.)

前文を受ける一般の非制限的關係代名詞の一種と見ればよいが, この用法は D. H. Lawrence に出現することが多いという印象がある。次の 3 例は彼の短篇からである。

103. "There's that envelope for the organist's fund... Which is all I can afford," she said. (B. C.)

104. "They're vicious little nuisances, moles are." With which her wrath vanished. (B. D.)

105. ... he... brushed the ash from his waistcoat. After which he raised his head. (B. D.)

2. 8 関係副詞 that は when, why, how の代用になるが, where の代りをつとめるのは anywhere など '— where' に続く場合に限られているとされるが, そうではないのが次例である。

106. She was standing in the same place on the porch that she had been when Lov first came into the yard. (A. D.)

これは先行詞を the same が修飾しているからかもしれない。もっとも次例は the same 付きの where である。

107. Do you sleep in the same bed where she slept? (B. C.)

関係副詞 where は when, why, how と違って普通省略されることはないと言われるが, 次例では, これも the same 付きだが, 省略されている。

108. I don't have dates with anyone who works at the same place I do. (A. C.)

039 でも二重限定のA条件を導く where が省略されていた。039 は Updike であり, 106, 108 は Caldwell である。where の省略や that による代用はアメリカニズムと見てもよいのだろう。

### § 3 関係代名詞の各種混用

3. 1 疑問代名詞の whom が口語用法で who になる傾向は非常に強いが, 関係代名詞でも whom が who に置換されている場合がときどきある。

109. A son who I have raised as best I can. . . (A. C.)

110. . . this boy who he had let go twice but had taken back each time. . . (A. D.)

111. Is this his reward — to turn around at the age of sixty-three and find his sons, who he loved better than his life, one a philandering bum — (A. C.)

112. I'm having dinner with my friends. . . who I told you about. (A. C.)

113. . . Mrs. Dubin, who I happen to greatly respect, was working in the library. . . (A. C.)

114. This is to introduce to you Miss Joan Denver who I talked to you about. (B. D.)

最後の 114 を除きアメリカ例で, また会話体が多い。114 は Maugham であるが, 発話者が十代の若者であることに関係があるのかもしれない。

3. 2 挿入節を含む関係詞節で関係代名詞 who が whom になることはしばしばある。

115. — the mother ends her days in bitter resentment of the son who she feels has cast her out. . . (A. D.)

これは who のままである例であるが, 直後の挿入節 'she feels' に「幻惑」されて who は whom になり勝ちで, このことは一般に whom が who になる英語の傾向に逆行するかのようである。以下そのような whom 例を挙げる。最初の例は二重限定にもなっている。

116. . . he's the first contemporary I've ever met whom I'll admit is my superior in mental capacity. (A. C.)

117. . . the Royalists made their final attempt to destroy the man whom they had hoped would use his power. . . (A. D.)

118. . . Davout (whom he had reason to believe had spied upon him while he was acting as chief of military police). . . (A. D.)

本来主格 who であるべきこの whom が, 更に目的格の形を取るが故に省略されるという, 三段跳びのような現象もしばしば起こる。

119. "Who is Edna?" "The girl you thought was me." (A. C.)

120. . . neither of them would lend a penny to any man they merely suspected

was going to buy an automobile with it. (A. D.)

121. ... she got a long-distance call from a man she said was a friend. ... (A. C.)

122. My mother is the only person I feel really loved me. (A. C.)

123. He has learned nothing except to toady to those he feels are superior. (A. C.)

124. You're the only man I know does something good and I want to hit him. (A. C.)

いずれもアメリカ例であり、120を除き会話体である。120はFaulknerの*The Reivers*からであるが、この長篇は1人称の語りの形式で、地の文と言っても会話体に近いものである。最後の124でand以下も内容的には関係詞節の中に入っているが、目的語を伴っていてこれは破格構文である。なおこの内容は二重限定であるが、B条件の関係詞がなく、andが入っていて、§1のものとは異なる。結局同時成立のandによって二重限定的内容を表わしていることになる。andを消してwhomを入れ、himを除けば標準的二重限定関係詞節になる。

以上のようにwhomとして関係詞が残っている場合よりも省略される場合の頻度が高いように思われるが、この'who→whom→省略'のグループに対し、同じ挿入節含みでwhich(主格)→省略のグループがある。勿論途中にwhich(目的格)が理論上介在している筈である。

125. ... having explored all the problems he felt were within the scope of fiction. (A. D.)

126. ... she passed along the lane she thought was the right one. ... (B. D.)

127. He wrote Brett a letter she felt was cruel. ... (B. D.)

128. Or we could go to a picture I hear is great. (A. C.)

129. ... with a sort of greed, a hunger she hadn't known was in her. (A. D.)

こちらの方はイギリス例も目につく。

3. 3 前項で挿入節含みの関係詞節における主格関係代名詞の省略を見たが、それ以外の主格関係代名詞の省略について、スクール・グラマーでも扱われる標準的なものには、1) 強意構文、2) There isで始まる文、3) 関係詞節中にthere isが入っている文、の3種類がある。これらのIt isにせよ、There/there isにせよ、それは名目的なものであり、いわば影の薄いものであり、関係詞が省略されても先行詞はそのまま他の部分とつながって文脈の根幹は保たれる。その省略はむしろ自然の成り行きである。強意構文の場合については次章4. 3で扱い、ここではその他の標準的なものの比較的珍しい例のみ挙げる。最初の2例はThere isで始まるものであるが、Shakespeareの「十二夜」からのもので、この構造の歴史の古いことがわかる。



130. ... there is at the gate a young gentleman much desires to speak to you. (B. C.)

131. There is no woman's sides/Can bide the beating of so strong a passion/As love doth give my heart. (B. C.)

これに対し次の二つはアメリカの現代例であるが、Here'sで始まるものである。

132. Hey, here's one isn't broken... (A. C.)

133. Here's a fine wonderful man saves your brother's life... (A. C.)

3. 4 挿入節があるわけでもなく、また標準化された場合でもない主格関係代名詞省略の例が次のグループである。

134. The only one still talks about it is my wife. (A. C.)

135. She was the one had got the money. (B. D.)

136. This is the woman claims to be your mother. (A. C.)

以上は省略されたものが who であり、以下は which 例である。

137. ... yours was the first car in an hour stopped for me. (A. C.)

138. Isn't that the worst God-damn report was ever written? (A. C.)

139. You got a whip goes right through cloth, don't you? (A. C.)

140. ... you know they're liable to do anything comes into their heads. (A. C.)

ほぼアメリカの会話体であると言えよう。先行詞は主語、目的語といずれの場合もあり区別はない。Jespersen はこの省略を、

Nowadays the construction is only found as a vulgarism or as an achaism in poets. (MEG. III, p. 144)

と言っているが、上例の如く決して珍しくはない。

3. 5 複合関係代名詞 whoever, whomever の混用はよく言われるところである。

141. ... we will be responsible for whomsoever stays with you in the house. (B. C.)

stays の主語たる複合関係代名詞が導く名詞節が、全体として for の目的語になっていることから起った混用である。

142. ... whoever he was looking for didn't seem to be there. (A. D.)

これは逆に for の目的語たる複合関係代名詞の導く名詞節が、全体として didn't の主語になっていることから起った混用である。しかし次のような場合は何とも説明のしようのない混用である。whom→who の一般的趨勢の表われの一つなのであろう。

143. Take 'em downstairs and give 'em back to whoever they belong to. (A. C.)

3. 6 who, whom が the person(s) や any person(s) という先行詞を中に含む複合関係代名詞として使われることが現代英語にも相当ある。

144. The realisation that Nancy was who she was, and that she was not Tess, was my undoing. (A. D.)
145. And here I must make clear that had I not been who I am, and born and reared as I was, I would probably never have dared. . . (B. D.)
146. Because who I really love. . . is Mr Mellors. . . (B. C.)
147. He can bring whom he likes. (B. C.)
148. My aunt, . . . if that's whom you mean, is fast asleep by now. . . (B. C.)
149. But it is not I/Who can loose whom the Pope has bound. (B. C.)
150. . . I'll have nobody in the wood, except whom I may invite. (B. C.)
151. She. . . came. . . looking altogether a different person from whom she had been hitherto. . . (B. D.)

初めの3例は who, あとの5例は whom であるが, 146 の who は 142 の whoever, 151 の whom は 141 の whom(so)ever と同じ論理のものである。イギリス例が多い。

#### § 4 各種の強意構文

4. 1 スクール・グラマーは it=形式主語, that (接続詞) 以下=真主語の文型については詳しい。

It is a sheer fact that we shall die sooner or later.

それに対して強意構文の It is — that については, その出現頻度が前者に決して劣らないにもかかわらず余り熱心ではない。以下この強意構文の諸相を眺めたい。

強意構文の that の多くは who, whom, which で置き換えることの出来る関係代名詞であるが, 次の場合はどうか。

a) It was yesterday that he came with her.

b) It was with her that he came yesterday.

この that は接続詞と見られることが多い。しかし一般の関係詞構文のやり方で a) を二文に分解するならば,

a-1. It was yesterday.

a-2. Yesterday he came with her.

となり, that=Yesterday=副詞, そして同時に that は連結語であるから, 関係副詞と見ることが出来る。同様に b) を二文に分解すれば,

b-1. It was with her.

b-2. With her he came yesterday.

となり, that=With her=副詞句, そして同時に that は連結語であるから, これも関係副詞と見ることが出来る。強意構文のすべての that が関係代名詞もしくは関係副詞である

なら、It は論理上の先行詞、直前の語や語句は形式上の先行詞となり、強意構文のすべてが、本稿の主題たる形容詞節とかかわることになる。

4. 2 強意構文のうち大半のものは主語強調か他動詞の目的語の強調である。

152. ...it wasn't only his family who spoiled Harold, he reflected, it was everybody... (B. D.)

153. It is not everyman... whom I would expose to your fascination so light-heartedly. (B. C.)

152 は not only... (but) のからんだ主語強調, 153 は否定文の目的語強調である。連結詞が関係代名詞のものでは更に次のようなものがある。

154. It is a boy that you are. (B. C.)

155. It was Birkin whose hand... had closed... over the hand of the other. (B. D.)

156. It is the man whose love wanes. (B. D.)

154 は主格補語の強調で珍しい。155, 156 は所有格強調で、例えば 156 の元の文は The man's love wanes. である。

4. 3 強意構文の連結詞はしばしば省略される。次に挙げる 157 のような目的格の場合だけでなく、3. 3 で触れたが、158~160 のように主格も省略される。

157. It is God's work I have come to the land to do. (A. C.)

158. If it was a prince came here for you it would be no different. (A. C.)

159. Well, it was Bela sent me over/Just for a week. (B. C.)

160. It was them gave Curran the idea. (B. C.)

160 は主語強調の関係詞省略であるにもかかわらず、強調された主語は them として残っている。It is me. の連想なのであろう。もっとも Jespersen は、主語強調の関係詞省略タイプでは名目的な It is のあとで、強められた語は直後の動詞の主語である意識がまさるので目的格になることはないと言っている (*MEG. III*, p. 145)。次は全く逆で、目的語強調であるのに強調部分は she になっている。

161. ...he could hardly believe that it was she whom he had dared to love. (B. D.)

この 2 例などは全く自由奔放な感じである。

4. 4 前置詞の目的語の強意構文の扱いは多少複雑である。

162. ...it is not the poet St. Dennis of whom Gowan speaks so much as his own invention... (A. D.)

163. ...he should ask who it was of whom Jesus spoke. (B. D.)

164. ...it is these people — and there are many of them — for whom the deficiency of Latin and Greek is most unfortunate. (B. D.)

165. It was Shaw... to whom Hardy turned for the loan of a dress coat in which he could attend... (B. D.)

166. It was a strange world into which Ashenden found himself thrown... (B. D.)

このように強意構文で前置詞を関係代名詞の直前に置く型は意外に多い。これに対して前置詞を関係詞節の末尾に置いたのが次例である(関係詞は省略)。

167. It was death she was angry with, not her children. (A. D.)

上記二つの型は目的語だけを強調する形式であるが、第3の形として‘前置詞+目的語=副詞句’を強調するのが次の諸例である。

168. ... it was not for him that she was waiting there. (B. D.)

169. ... it was of lamentations and entreaties that she was really afraid. (B. D.)

170. It was with an effort she roused herself... (B. D.)

一般に先の二形式と意味の上で微妙な違いがある筈である。この副詞句強調では連結詞を関係副詞と見てきたが(4. 1), 勿論 whom や which は使われず, that が用いられている(170は省略)。

4. 5 以上主語, 他動詞の目的語, 補語, 所有格, 及び前置詞の目的語の強調例, それにその連結詞の省略も見てきた。次に単一副詞の強調を見る。これの出現が意外に多い。副詞の強調なので連結詞は that かその省略, that の品詞はやはり関係副詞と見る。

171. ... it was here that I was seriously tempted to leave her. (B. D.)

172. It was here they were digested and sorted... (A. D.)

173. Then it was that his quick and anxious glance asked the question: "Which?" (A. D.)

171, 172は here, 173は then の強調, うち 172は that 省略。このような明らかに時や場所を表わす単一副詞だけでなく, 以下はより一般的な副詞の強調である。特に頻度に関する副詞の場合が多い。

174. It was seldom that she thought of the mountains. (A. D.)

175. It is seldom that one finds all things at one market — wine, food, love and firewood. (A. C.)

176. It was seldom he was so confidential. (B. D.)

177. It was rarely she saw his master's face. (B. D.)

178. ... it's not often I treat myself. (B. C.)

179. It was often that he suspected them to be liars. (A. D.)

180. Just this once. It's not often I ask you to do anything for me. (B. C.)

以上7例中4例は that 省略, often の場合は否定のことが多い。

181. It was only later that I remembered these voices. (A. D.)

182. It was only quite recently that they executed a Prime Minister. (B. C.)

181 の later は副詞の比較級である。その他一般の様態を表わす副詞の強調例では、

183. It was very quietly that I remarked. . . (B. D.)

184. . . it was quite coolly that he thought how much better it would be if. . . (B. D.)

185. It was thus that she recorded her permanent resentment at the loss of Septimus Small. (B. D.)

次は副詞的用法不定詞の強調である。

186. It is to find out the secret of this land that you have come. (B. C.)

次は現在分詞 (分詞構文) の強調例である。

187. . . perhaps it was sitting at this very table that he remarked to a friend of mine. . . (B. C.)

この 187 は J. Conrad の短篇集からのものであるが、次の 2 例も同一作品集からの引用で、やはり ~ing 部分を強めている。しかし今度のは現在分詞ではなく動名詞であり、188 は主語強調、189 は目的語強調である。

188. It was hearing herself called Laughing Anne that had started her sobbing like a fool. (B. C.)

189. 'Tisn't selling your old *Sagamore* (a ship's name) wants. The blamed thing wants tomahawking. (B. C.)

4. 6 強意構文に於ける時制については、稀に前半、後半の不一致の場合がある。

190. It is they who went to sleep as they pulled. . . (B. C.)

特に過去完了を含む場合が注目される。

191. I knew it was he who had killed him. (B. D.)

192. Till then it had always been he who sought her company. (B. D.)

193. It was at Cambridge that he had met Ségouin. (B. D.)

194. . . it had been his father who had first suggested the investment. (B. D.)

191 と 193 は '過去+過去完了' 192 は逆に '過去完了+過去' 194 は '過去完了+過去完了' で、考えられるすべての組み合わせが出現していることになる。191, 192 は Maugham, 193, 194 は Joyce からの例で、同一の作家でも用法は一定していないということになる。

4. 7 次は二重限定の強意構文である。

195. What is it you want that you haven't got here? (B. C.)

次例は 195 と形は同じだが、後の which 節は強意構文、はじめの which 節は the truth を先行詞とする普通の形容詞節である。このような場合、強意構文の方は that が普通使われると Jespersen は言うが (MEG. III, p. 91), 本例では両方共 which である。

196. ... it was useless to utter such truths... But it is only the truth which is useless which really matters. (B. D.)

4. 8 これまで扱った強意構文は 'It is — that' で it は常に主語であったが、次例の it は目的語であり、'it to be — that' の形をとる。これは '形式目的語 + O. C + 真目的語' と酷似しているが実は強意構文であり、that はこの場合主格関係代名詞になっている。

197. You must not suppose it to be caprice on my part that has led me to change my publishers. (B. D.)

4. 9 It の代りに That などを用いた形は強意構文と一線を画するとする見方が一般のようである。確かに It より That は力強く、単に論理上以上の、真の先行詞の感じが強いが、しかし文の構造といい、間に入る語の強調されている事実といい、少くともある種の強意構文と見て差し支えないだろう。

198. That was her creek we were playing along this afternoon. (A. C.)

199. — don't you think that's a bit of a Hindoo we've got hold of here? (B. C.)

2例とも後の that は省略されている。次の例は This で始まるが、同様に考えられる。

200. ... this is a nice lady you're talking to. (A. C.)

次は Shakespeare の *Othello* からのものであるが she で始まる。

201. ... she's a simple bawd/That cannot say as much. (B. C.)

これも強意構文と見るが、諺によくある、意味が裏返しになるタイプの一種である。

It is an ill wind that blows nobody good.

It is a wise father who knows his own child.

4. 10 強意構文の it, 形式主語の it, 時を表わす it, 状況の it などをめぐって統語上の混乱が生じていると見られるものがある。

202. It was a morning early in August that trembling at the knees Michael had gone down to the station to meet Nick Fawley. (B. D.)

これは Murdoch の長篇からの引用だが、作者がこの文をスタートしたとき、It は時を表わすものであったのだろうが、それなら August のあとは接続詞 when が来るべきであろう。that を残すとすれば副詞句強調で、on a morning とすべきであっただろう。

203. Your letter was jolly good to me really — I always thank God when a man will say straight out to me what he has to say. But it is rare when one will. (B. D.)

これは D. H. Lawrence の書簡の一節であるが、But 以下は「率直に言ってくれる人はめったにない」ということである。この文で it は状況（前文の when 以下の内容）を表わし、うしろの when は接続詞であろう。但しそれならこの when 以下の状況は it の中にこめられているわけで、when 以下は言わずもがなという感じがする。むしろ作者はここで、

a) It is rare that one will.    あるいは

b) It is rarely that one will.

と言いたかったのではないか。a) は形式主語 It の構文, b) は副詞強調の強意構文である。唯, 作者はここで前文の when a man will... を強く意識し, それを意識的に繰り返そうとした為, a) の形式主語のあとに when 以下を続けてしまったのではないだろうか。

204. It's this course where each boy in class has to get up in class and make a speech. (A. C.)

これは Salinger の *The Catcher in the Rye* の一節であるが, 文脈から判断して副詞句強調の強意構文である。時や場所の副詞句が強調されるときに連結詞が when, where になる場合, 例えば

It is in the spring time when the orange trees are nice.

It was in a Norfolk village where I first ran across him.

(「研究社英文法シリーズ」21巻, p. 25)

のケースである。であれば in this course とすべきであろうが, in が脱落しているのは, 作者にはこれが副詞的対格 (adverbial accusative) として意識されているのであろうか。

## § 5 記述の対格

5. 1 of を欠いた形容詞句, Onions のいわゆる記述の対格 (accusative of description) について Jespersen は「19世紀になってよく使われるようになった」と言うが (MEG. III, p. 398), スクール・グラマーでは 'It is no use ——' の形が動名詞の熟語的用法例として登場する位である。一方大学教科書でこの of を欠いた形容詞句に言及のあるものは少ない。例えば朝日出版の John Updike; *The Music School* には名詞修飾としての記述の対格たる次の2例が見出される。

205. ... I want to get you a man your own size. (A. C.)

206. ... Dr. Greenstein with a pointed nose and almond eyes the color of ivy... (A. D.)

そしてこの教科書の注釈者は your own size にも the color of ivy にも全く言及していない。しかし大抵の学習者にとりこれは奇妙な印象を受ける筈の表現であり, 説明を加える必要があろう。出現頻度から見て age, size, color が圧倒的に多いので, 以下この三種類を中心に先ず名詞修飾型から例を挙げる。歴史の浅い記述の対格の中でも特に名詞修飾用法は, 補語用法から最近になって発展したものであると Jespersen は言っている (MEG. II, p. 389)。

5. 2 先ず age 例, 代名詞所有格に続くものが多い。

207. Besides, a person my age shouldn't squander their eyes. (A. D.)

208. They said he was too young to be married to a woman my age. (A. C.)  
 209. Many, many men my age and in my income bracket... (A. D.)  
 210. Maybe I'm intending to prove I know something about people your age? (A. C.)  
 211. If there's anything a kid your age needs, it's sleep. (A. C.)  
 212. He's probably somewhat absentminded like most poets his age... (A. D.)  
 213. He knew quite a lot about tennis, for a kid his age. (A. D.)  
 214. His other relatives... — two female cousins his age — lived in Odessa. (A. D.)  
 215. He is pining for me... in spite of being able to play with his cousin, just his age. (B. D.)

205 のように one's own age も目につく。

216. Do you think, Jude, that a man ought to marry a woman his own age, or one younger than himself...? (B. C.)  
 217. ... she had not delivered her heart to a young man her own age... (B. D.)

その他変形されたもの、

218. ...how little they can do... for someone that age... (A. D.)  
 219. ...to marry the fellow to a woman nearly twice his age... (B. D.)

5. 3 次に size 例, the size of ~ の形が多い。

220. A hard little lump the size of a pea. (A. C.)  
 221. ... secrets are an unusual commodity in a town the size of Garden City. (A. D.)  
 222. It was an odd thing to see on a hot day in a town the size of Paradise Chapel. (A. D.)  
 223. It's a Catholic magazine the size of the *Reader's Digest*. (A. D.)  
 224. The ancients... seized rocks the size of suckling pigs... (A. C.)  
 225. ... it might be best to put an ocean the size of the Atlantic between herself and what she needed to forget. (A. D.)  
 226. ... a couple of brass medals the size of a sixpence... (B. C.)

その他変形されたもの、

227. He had a big, hearty laugh that would have fitted a man twice his size... (B. D.)

次例は size でなく width であるが、同類と見る事が出来る。

228. ... he... showed me a narrow little room the width of a passage... (B. C.)



もっとも、Murdoch 例であるが、of の残っている場合がある。

229. You can't dispose of a thing of this size in this cool way. (B. C.)

5. 4 次に color 例, the color of ~ の形が多い。

230. She had hair the colour of mahogany with a gloss on it... (B. D.)

231. She had hair the colour of pale honey... (B. D.)

232. She was a very tall girl... with hair the colour of conkers... (B. D.)

233. He was a small man, with sunken cheeks the color of brick... (A. D.)

the same color as~も目につく。

234. He had skin the same colour as the turf-coloured bogwater... (B. D.)

235. ... the wide bed was covered with a pink spread almost the same color as the lamp. (A. D.)

5. 5 以上、あたかも of の欠落したかのような形容詞句、記述の対格の名詞修飾について、圧倒的に出現頻度の高い age, size, color の例を見てきた。形容詞句ということであれば次は補語としての用法で、名詞修飾の場合ほど目立たないが、やはり of の欠落したかのような形が be 動詞に続く。

236. ... I never believed it when I was your age. (B. C.)

237. I cannot believe that you are the age you say. (B. D.)

238. She lost her bathing suit because it was a size too big. (A. D.)

239. He was the size and build of a middleweight gone a little heavy. (A. D.)

240. ... the marbles were the colour the sea was at night. (B. D.)

こちら age, size, color が多いのであるが、239 は size と対応して build も使われている。240 の color は were の補語であるが、それを先行詞とする省略された関係代名詞はうしろの was の補語であり、いわば二重の例文となっている。

次の 2 例は be 以外の動詞に続く補語例。

241. He professed to be eighty-four years old, but he didn't look his age. (B. C.)

242. ... tiger lilies bloom the size of a man's head. (A. D.)

しかしこのような記述の対格に対して、以下のように of を伴った補語例もある。

243. My son's not of marriageable age. (B. C.)

244. ... his ears, which were again of the right masculine size. (B. D.)

245. ... they are of a shape solid and geometrical... (B. C.)

## § むすびに

以上形容詞相当語句に関して、スクール・グラマーではカバーし切れない部分で、小説や戯曲、評論などの中に比較的頻繁に出現する語法・文法現象を 5 項目に分けて考察し、

出現頻度の確認の為その用例を出来るだけ丹念に列挙した。それと同時に教室でのそれらの説明の必要性やその方法についても私見を述べてきた。語法カードを作るようになった筆者の最近20年の読書傾向や範囲を物語るかのように、出典が現代に偏っているきらいはあるが、そのような領域が大学教科書に選ばれることの多いことを考慮すれば、あながち不当な選択であったとは思わない。先にも述べたように、文学研究徒が文学的読書をする際に副産物として書きためた語法カードの整理から、本稿は生まれた。スクール・グラマーからはみ出たものとしてこれら語法・文法現象を教室で補足的に解説、説明するとき、授業担当者が用例集として本稿を利用出来ればと思う。('87. 10, 12)

#### List of Works Cited

- |   |  |
|---|--|
| 001. T. Hardy, <i>The Collected Letters</i> , Vol. 5                  | 027. J. D. Salinger, <i>Seymour-An Introduction</i>            |
| 002. G. Greene, <i>Ways of Escape</i>                                 | 028. E. Caldwell, <i>Tobacco Road</i>                          |
| 003. S. Bellow, <i>Mr Sammler's Planet</i>                            | 029. F. S. Fitzgerald, <i>This Side of Paradise</i>            |
| 004. E. Caldwell, <i>Tobacco Road</i>                                 | 030. J. D. Salinger, <i>Seymour-An Introduction</i>            |
| 005. I. Murdoch, <i>The Sandcastle</i>                                | 031. G. Greene, <i>Travels with My Aunt</i>                    |
| 006. T. Williams, <i>The Glass Menagerie</i>                          | 032. T. S. Eliot, <i>The Cocktail Party</i>                    |
| 007. E. Hemingway, <i>The Garden of Eden</i>                          | 033. J. C. Oates, <i>Unholy Loves</i>                          |
| 008. J. Joyce, <i>A Portrait of the Artist as a Young Man</i>         | 034. Ibid.   |
| 009. W. S. Maugham, <i>Theatre</i>                                    | 035. F. S. Fitzgerald, <i>This Side of Paradise</i>            |
| 010. W. S. Maugham, <i>Christmas Holiday</i>                          | 036. G. Greene, <i>Ways of Escape</i>                          |
| 011. T. H. Adamowski's Essay in <i>D. H. Lawrence's "Lady"</i>        | 037. Ibid.   |
| 012. C. H. Smith, <i>T. S. Eliot's Dramatic Theory and Practice</i>   | 038. <i>New York Times Book Review</i> , May 19, 1968          |
| 013. E. O'Neill, <i>Ah, Wilderness !</i>                              | 039. J. Updike, <i>The Centaur</i>                             |
| 014. A. Christie, <i>Cards on the Table</i>                           | 040. R. Lynd, "Jean Valjean"                                   |
| 015. T. Capote, <i>Breakfast at Tiffany's</i>                         | 041. R. Lynd, "Robinson Crusoe"                                |
| 016. D. H. Lawrence, "The Thorn in the Flesh"                         | 042. J. Conrad, <i>The Shadow Line</i>                         |
| 017. E. Hemingway, <i>Islands in the Stream</i>                       | 043. R. Milberg-Kaye, <i>Thomas Hardy — Myths of Sexuality</i> |
| 018. T. Hardy, <i>The Collected Letters</i> , Vol. 3                  | 044. T. Hardy, <i>The Collected Letters</i> , Vol. 5           |
| 019. A. Huxley's Introduction in <i>The Letters of D. H. Lawrence</i> | 045. B. Shaw, <i>Saint Joan</i>                                |
| 020. W. Cather, <i>Uncle Valentine and Other Stories</i>              | 046. H. C. Duffin, <i>Thomas Hardy</i>                         |
| 021. D. H. Lawrence, <i>Lady Chatterley's Lover</i>                   | 047. R. H. Taylor, <i>The Neglected Hardy</i>                  |
| 022. A. Miller, <i>Death of a Salesman</i>                            | 048. D. H. Lawrence, <i>Lady Chatterley's Lover</i>            |
| 023. A. Miller, <i>All My Sons</i>                                    | 049. G. Greene, <i>Travels with My Aunt</i>                    |
| 024. G. Greene, <i>The Comedians</i>                                  | 050. I. Murdoch, <i>The Unicorn</i>                            |
| 025. G. Greene, <i>The End of the Affair</i>                          | 051. W. S. Maugham, "The Consul"                               |
| 026. J. D. Salinger, <i>The Catcher in the Rye</i>                    | 052. G. Greene, <i>Ways of Escape</i>                          |
|   | 053. T. Hardy, <i>Jude the Obscure</i>                         |
|   | 054. T. Hardy, <i>The Collected Letters</i> , Vol. 6           |
|   | 055. J. C. Oates, <i>Unholy Loves</i>                          |
|   | 056. J. D. Salinger, <i>The Catcher in the Rye</i>             |

057. T. Hardy, *A Laodicean*
058. W. Cather, *Uncle Valentine and Other Stories*
059. J. Jauncey, *Science Returns to God*
060. D. H. Lawrence, *Aaron's Rod*
061. T. Hardy, *The Collected Letters*, Vol. 6
062. D. H. Lawrence, "St. Mawr"
063. G. Greene, *Ways of Escape*
064. J. Conrad, *Chance*
065. J. Conrad, *The Secret Agent*
066. J. London, *White Fang*
067. J. London, "The Scarlet Plague"
068. F. R. Stockton, "The Lady, or the Tiger?"
069. J. Conrad, *Chance*
070. D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*
071. G. Greene, *Ways of Escape*
072. F. S. Fitzgerald, *This Side of Paradise*
073. T. Hardy, *The Collected Letters*, Vol. 4
074. W. S. Maugham, *Christmas Holiday*
075. A. Trollope, *The Warden*
076. M. Cowley's Introduction in *Winesburg, Ohio*
077. A. Christie, *Cards on the Table*
078. T. Hardy, *The Collected Letters*, Vol. 6
079. Ibid.
080. Ibid.
081. T. Hardy, *Two on a Tower*
082. J. Updike, *Rabbit, Run*
083. F. S. Fitzgerald, *This Side of Paradise*
084. J. Wain, *The Contenders*
085. G. Greene, *Getting to Know the General*
086. J. Steinbeck, *The Long Valley*
087. H. T. Moore, *The Priest of Love*
088. B. Malamud, *Rembrandt's Hat*
089. G. Greene, *The Human Factor*
090. A. Huxley's Introduction in *The Letters of D. H. Lawrence*
091. G. Greene, *The Human Factor*
092. T. Williams, *Sweet Bird of Youth*
093. T. Hardy, *The Collected Letters*, Vol. 6
094. A. Miller, *Danger : Memory !*
095. F. S. Fitzgerald, *The Great Gatsby*
096. F. E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy*
097. T. Hardy, *The Collected Letters*, Vol. 4
098. W. Cather, *The Professor's House*
099. F. E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy*
100. I. Murdoch, *The Sandcastle*
101. T. Hardy, *The Return of the Native*
102. T. Capote, *Breakfast at Tiffany's*
103. D. H. Lawrence, "Daughters of the Vicar"
104. D. H. Lawrence, "Second Best"
105. D. H. Lawrence, "The Shadow in the Rose Garden"
106. E. Caldwell, *Tobacco Road*
107. D. H. Lawrence, *John Thomas and Lady Jane*
108. E. Caldwell, *Love and Money*
109. E. Albee, *Who's Afraid of Virginia Woolf?*
110. E. Hemingway, *Islands in the Stream*
111. A. Miller, *Death of a Salesman*
112. B. Malamud, *Dubin's Lives*
113. Ibid.
114. W. S. Maugham, *Theatre*
115. R. Milberg-Kaye, *Thomas Hardy — Myths of Sexuality*
116. F. S. Fitzgerald, *This Side of Paradise*
117. R. L. Delderfield, *Napoleon's Marshals*
118. Ibid.
119. F. S. Fitzgerald, *The Last Tycoon*
120. W. Faulkner, *The Reivers*
121. B. Malamud, *Dubin's Lives*
122. Ibid.
123. W. Saroyan, *The Human Comedy*
124. E. Albee, *The Lady from Dubuque*
125. R. Milberg-Kaye, *Thomas Hardy — Myths of Sexuality*
126. D. H. Lawrence, "The Virgin and the Gipsy"
127. H. T. Moore, *The Priest of Love*
128. B. Malamud, *Dubin's Lives*
129. J. C. Oates, *Unholy Loves*
130. W. Shakespeare, *Twelfth Night*
131. Ibid.
132. E. Albee, *The Lady from Dubuque*
133. E. Hemingway, *Islands in the Stream*
134. A. Miller, *All My Sons*
135. A. Christie, *Cards on the Table*
136. E. Albee, *The Lady from Dubuque*
137. J. Updike, *The Centaur*
138. Ibid.
139. E. Albee, *The Lady from Dubuque*
140. A. Miller, *Danger : Memory !*
141. The Paul Hamlyn Edition, *The Chil-*

- dren's Bible in Colour*
142. J. Baldwin, "Sonny's Blues"
  143. F. S. Fitzgerald, *The Great Gatsby*
  144. E. Caldwell, *Love and Money*
  145. M. Drabble, *The Millstone*
  146. D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*
  147. G. Greene, *Getting to Know the General*
  148. G. Greene, *Travels with My Aunt*
  149. T. S. Eliot, *Murder in the Cathedral*
  150. D. H. Lawrence, *John Thomas and Lady Jane*
  151. T. Hardy, *Under the Greenwood Tree*
  152. K. Mansfield, *The Garden Party and Other Stories*
  153. A. Christie, "The Case of the Discontented Husband"
  154. D. H. Lawrence, *The White Peacock*
  155. D. H. Lawrence, *Women in Love*
  156. D. Kay-Robinson, *The First Mrs Thomas Hardy*
  157. S. Anderson, *Winesburg, Ohio*
  158. A. Miller, *A View from the Bridge*
  159. T. S. Eliot, *The Cocktail Party*
  160. G. Greene, *Travels with My Aunt*
  161. A. Trollope, *The Warden*
  162. J. C. Oates, *Unholy Loves*
  163. The Paul Hamlyn Edition, *The Children's Bible in Colour*
  164. T. S. Eliot, *Selected Essays*
  165. M. Millgate, *Thomas Hardy: A Biography*
  166. W. S. Maugham, "Sanatorium"
  167. S. Bellow, *The Dean's December*
  168. K. Mansfield, *The Garden Party and Other Stories*
  169. J. Conrad, *'Twixt Land and Sea*
  170. D. H. Lawrence, "St. Mawr"
  171. G. Greene, *Travels with My Aunt*
  172. W. Cather, *The Professor's House*
  173. F. R. Stockton, "The Lady, or the Tiger?"
  174. T. Capote, "House of Flowers"
  175. J. Steinbeck, *Tortilla Flat*
  176. J. Galsworthy, *The Forsyte Saga*
  177. D. H. Lawrence, "The Prussian Officer"
  178. D. H. Lawrence, "The Christening"
  179. S. Crane, *The Red Badge of Courage*
  180. W. S. Maugham, *Theatre*
  181. T. Capote, *Breakfast at Tiffany's*
  182. G. Greene, *Travels with My Aunt*
  183. J. Conrad, *'Twixt Land and Sea*
  184. J. Conrad, *Tales of Unrest*
  185. J. Galsworthy, *The Forsyte Saga*
  186. The Paul Hamlyn Edition, *The Children's Bible in Colour*
  187. J. Conrad, *Within the Tides*
  188. Ibid.
  189. Ibid.
  190. J. Conrad, *A Set of Six*
  191. W. S. Maugham, *Christmas Holiday*
  192. W. S. Maugham, *Theatre*
  193. J. Joyce, *Dubliners*
  194. Ibid.
  195. A. Trollope, *The Warden*
  196. H. T. Moore, *The Priest of Love*
  197. T. Hardy, *The Collected Letters, Vol. 3*
  198. W. Cather, *Uncle Valentine and Other Stories*
  199. J. Conrad, "Amy Foster"
  200. E. Albee, *The Lady from Dubuque*
  201. W. Shakespeare, *Othello*
  202. I. Murdoch, *The Bell*
  203. D. H. Lawrence, *The Letters*
  204. J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*
  205. J. Updike, "Giving Blood"
  206. Ibid.
  207. T. Capote, "A Christmas Memory"
  208. E. Caldwell, *Tobacco Road*
  209. J. D. Salinger, *Seymour - An Introduction*
  210. B. Malamud, *Dubin's Lives*
  211. J. Updike, *The Centaur*
  212. J. C. Oates, *Unholy Loves*
  213. J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*
  214. B. Malamud, *Rembrandt's Hat*
  215. R. Tennant, *Joseph Conrad*
  216. T. Hardy, *Jude the Obscure*
  217. T. Hardy, *Old Mrs Chundle and Other stories*
  218. J. C. Oates, *Unholy Loves*
  219. J. Conrad, *'Twixt Land and Sea*
  220. B. Malamud, *Dubin's Lives*
  221. T. Capote, *In Cold Blood*
  222. T. Capote, *Other Voices, Other Rooms*
  223. J. Updike, *Rabbit, Run*
  224. J. Updike, *The Poorhouse Fair*
  225. P. Roth, *The Ghost Writer*

226. J. Conrad, "Amy Foster"  
227. Ibid.  
228. J. Galsworthy, "A Knight"  
229. I. Murdoch, *Bruno's Dream*  
230. G. Greene, *Doctor Fischer of Geneva or the Bomb Party*  
231. G. Greene, *Our Man in Havana*  
232. G. Greene, *May We Borrow Your Husband?*  
233. I. B. Singer, *A Friend of Kafka and Other Stories*  
234. J. Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*  
235. E. Caldwell, *Annette*  
236. I. Murdoch, *The Bell*  
237. T. Hardy, *The Collected Letters, Vol. 4*  
238. S. Bellow, *Mosby's Memoirs and Other Stories*  
239. E. Hemingway, *Islands in the Stream*  
240. J. Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*  
241. J. Conrad, *The Secret Agent*  
242. T. Capote, *Other Voices, Other Rooms*  
243. G. Greene, *The Human Factor*  
244. G. Greene, *Getting to Know the General*  
245. A. Christie, "The Adventure of the Egyptian Tomb"